受験者・合格者の属性

受験者（志願者）層及び合格者（入学者）層の分析については、各大学とも基礎的資料に関しては、継続的に調査を続けているようであるが、その結果については、受験者（志願者）は、受験機会の複数化に伴って、昨年度とはやや変わった傾向を示したといえよう。

受験者（志願者）の増減については、12大学、個人２件の報告があり、急激な増加の傾向があった大学(秋田大学、東京水産大学、徳島大学、長崎大学、大分医科大学)、逆に昨年よりは多少減少したと報告された大学（岩手大学）もあって、全国的には一律ではなかったが、全般的にみて増加の傾向であったといえよう。

また、身体に障害のある受験生で比較的重度及び軽度の障害者の受験がほぼ一定し、体幹上肢障害者は昭和60年度を境に倍増の傾向にあるとの報告もあった（藤芳衛)。

合格者（入学者）については、11大学、１機関、個人１件の報告があり、調査の結果は、従来の傾向に変化はなく、ほぼ固定している大学(徳島大学、香川大学)、合格率が前年度より低下した大学（大分医科大学）もあり、結果的には入試方法に事後選択制が採用されたことによる定員超過となった大学（熊本大学）もあった。

また、最近少人数の合格輩出校が減り、中部地方を境にして各高校からの志願者・合格者の輩出状況にかなりの違いが認められたとの報告もあった（大学入試センター)。

入学辞退者については、10大学からの報告があり、傾向としては昨年と異なり、入学辞退者が減少した大学が多く（岩手大学、秋田大学、東京医科歯科大学、東京水産大学、和歌山大学、熊本大学)、前年度と同じ水準で推移している大学(大阪大学)、逆に前年度よりも増加した大学(滋賀大学）もあった。

また、第２次募集の辞退率が圧倒的に高かったとの報告もあった（香川大学)。

入学辞退者の追跡調査の結果によると、辞退後の進学先は大多数が私立大学であったとの報告もあった（東京医科歯科大学、お茶の水女子大学、横浜国立大学、大阪大学、香川大学)。

次に、辞退の理由としては、「将来性」「第１志望学科が無い」「すべりどめ」を理由としてあげていることも報告されている（お茶の水女子大学、横浜国立大学、熊本大学)。

連続受験者については、２大学からの報告があり、そのなかには連続受験者の入試成績の年度間の変動、高校卒業年と入試成績との関係についての報告（東京大学）があり、他方では、単に受験者数の増加だけではなく、「共通第１次学力試験が高得点で、第２次試験で低得点であるもの」の増加がみられた。受験者数増加の当然の影響なのか、何等かの質的変化なのかの検討を要する問題と思われるとの指摘もあった(京都大学)。

１次志望者と２次志望者の比較については、３大学からの報告があり、アンケート調査の結果によると、第１志望とした者は地元大学指向

が強く、流動性が低く、第1志望としなかった者は他県高校出身者が多く、流動性が高いとの報告がなされている（福島大学）。

また、第2志望で入学した学生は学習意欲が低く、入学辞退者についても、第1志望合格者よりも多かったとの報告もあった（岐阜大学、鹿児島大学）。

第1次募集学生と第2次募集学生の比較については、6大学からの報告があり、第2次募集の志願者が減少したとの報告もあり（長崎大学）、第2次募集の入学者には浪人、他県高校出身者、留年者及び中途退学者が多いとの報告もあった（山梨大学、滋賀大学、福島大学）。

また、第2次募集の辞退者は少なく（知歌山大学）、入学後の成績でも明瞭な差は認められなかったとの報告もあった（宇都宮大学）。

男女の比較については、5大学からの報告があり、受験者及び合格者は、女子が漸増の傾向にある大学（旭川医科大学、東京水産大学）、逆に男子が増加の傾向を示してきた大学（長崎大学、熊本大学、大分医科大学）の報告があった。

出身都道府県別による比較については、10大学、1機関、個人1件と多くの大学等で調査研究が行われているが、受験者及び合格者ともに地元指向が従来通りに継続されていると報告された大学がほとんどであったが（旭川医科大学、秋田大学、東京水産大学、大阪大学、奈良女子大学、香川大学、長崎大学、熊本大学、大分医科大学、鹿児島大学）、首都圏からの志願者が増加し、県内からの志願者が減少した大学（横浜国立大学）、逆に県外者の合格者が増加した大学（電気通信大学、大分医科大学）もあり、遠隔地からの入学者が減少した大学（山口大学）もあった。

昭和61年度倍率の前年度との差として調査された結果、今年度の倍率低下は大きいが、一応は下ヒンジ付近にあり過大な変動とは言えないとの報告もあった（熊本芳朗）。

また、受験生が大学を選択する際に、地元・近県といった地理的要因がかなりのウェイトをもつことを明らかにし、さらに、学力（共通第1次学力試験得点）や学部系統別による、このような志願者の地理的分布の相違にも検討を加えたとの報告もあった（大学入試センター）。

現役・浪人の比較については、11大学からの報告があり、その調査結果をみると、現役の受験者が増加した大学（旭川医科大学、大阪大学、長崎大学）、また、例年の傾向で推移した大学（熊本大学、大分医科大学）もあり、浪人・他大学卒業者の増加の傾向がみられると報告された大学（秋田大学、東京医科歯科大学、一橋大学）もあった。

現役の合格率が低下の傾向にある大学（旭川医科大学、秋田大学、一橋大学）、逆に現役の占める割合が高い大学（岩手大学、東京芸術大学音楽学部、長崎大学）があり、例年の傾向で推移している大学（熊本大学）、現役、浪人、大学卒の間での合格率の差は認められないと報告された大学（東京医科歯科大学）、また、浪人の合格率が高いと報告された大学（秋田大学、東京芸術大学美術学部、電気通信大学、大阪大学、大分医科大学）もあった。

大学の学部、学科、専攻、コース等類型別の比較については、2大学からの報告があり、その調査結果からみると、受験者及び合格者を学部ごとに教育学部、法学部、経済学部、農学部

で比較しているが、従来通りか、さほど変化はなかったと報告している（香川大学）。

また、学部ごとの受験者については、工学部及び理学部に増加が目立ち、文学部、医学部及び法学部がやや増加し、薬学部及び教育学部の減少が目立ったとの報告もあった（熊本大学）。

大学における学習及び生活

本年度も共通第１次学力試験、２次試験の各得点や総得点と学内成績、高校調査書と学内成績、共通第１次学力試験と２次試験などのそれぞれについての相関関係の調査検討が大学での進歩を示す学生に入学してもらいたいという願望のみならず、大学の実施する入学試験科目が入学者の選抜に当たって信頼性が高く妥当なものであるか否かを考察するためにも多くの大学で行われている。

共通第１次学力試験と２次試験との間については何の関連性もないことを報告している大学がある一方で、特定の試験科目相互間に安定した有意味な相関係数が得られているものもある。入試の成績と大学の成績の間には一般的にいってあまり関連は見られないが、高校調査書の評点の平均については、入試成績との間に見られたものよりも高い相関があり有意味な結果が得られており、現役・浪人の区別なく高校調査書の評定値の高い者に入学後の成績に問題のある者が少ないことも報告されており、評定値の高さと医師国家試験合格率と関係があるという報告もある（高知医科大学）。また推薦入学の高校格差を検証するために高校調査書と大学成績との関連についての研究を行っているところもある。しかし、この関係についても否定的なものが報告されており、さらにこの問題がもつ学力の識別力について多くの研究を重ねて、入学選抜資料としての有意義性を検討することが必要であろう。小論文は記憶の再認を中心とした客観テストによる入学者選抜に対する批判の一つとして用いられることが多くなったが、その評価と入試総得点、共通第１次学力試験成績、各科目の入試成績の間に有意味な相関があり、選抜方法としての意義を高く評価するものがある。しかし、入学後の成績との関連についても教養課程での成績、専門課程での成績との間で考察されているが、必ずしも肯定的関係のみが示されてはいない。面接試験については、入試成績や高校成績との間に有意な相関があり、選抜方法としての識別力を評価するとともに、評定に当たっての主観性を取り除くために面接成績の順位相関による検討を行ったり、面接グループごとの評定のばらつきを分散分析を行うことで面接法による試験の信頼性を高めるための努力がなされている（滋賀医科大学）。

推薦入学、２次募集による入学の場合の学内成績の比較も行われている。推薦入学制の導入は入学選抜の基準を多様化して特色のある学生